

ギターの動機

部活が始まった放課後の教室はいつも閑散としていた。運動部に所属しない何人かの生徒が談笑してたり、文化部の生徒が集まって活動をしている風景を時折見かけたが、窓の外から聞こえる運動部の掛け声が、いつも清んでいた。そんな放課後の教室に中学2年の夏休み明け頃から、フォークギターの音色が響くようになった。そして折からのフォークブームで何人かの生徒がギターの腕を競うようになった。彼等がギターを弾き始めると、次第に何人かの愛好者の輪が出来た。そしてたちまちギター弾きの生徒は、羨望の的となり人気者へとなっていった。

そんな風景がしばらく続いたある日、僕は部活が急遽中止となり着替えて教室へ戻る途中、1組の教室でギターを弾く日焼けした女子の姿を目にした。

「女子でもギターやる子がいるんだ・・・」

と思うとしばらく廊下で立ち止まり、覗き込んでいた。ギターを弾く彼女の横で2人の女子がリズムを取りながら歌っている。3人とも見覚えのある顔だったけれど、名前が出てこなかった。

「戦争が終わって、僕らは生まれた・・・」

音楽が得意な僕でも聞き覚えのあるメロディだった。

「大人に（大人に）くなって（なって）、歩き始める・・・」

演奏が終わるのを待つ僕は、

「なんて曲だっけ？」

と声をかけた。

「これは、作詞が北山脩、作曲は、あつ！杉田二郎。『戦争を知らない子供たち』ですよ」

彼女は笑顔で、でも少しはにかみながら答えた。

「ギター弾くんですか？」

一緒にいた女子の一人に聞かれたとき、僕は咄嗟に「弾かない」と答えた。なぜか「弾かない」と正直に答えることが出来なかった。それまで、ギターなど触ったことも無かったし、授業以外に時折流行歌を聴くくらいしか音楽との接点はなかった。授業で聞くクラシック音楽の長く退屈な時間には閉口していたし、歌唱の試験のある前日は、他のどの試験よりも緊張していた。正直

プレビュー版

に言えば音楽はあまり好きではなかったのだ。なのに、何故「弾かない」と答えたのだろっ？

2年の秋はどの運動部でも、夏の中体連本大会で引退した3年生に代わり、新チームが「新人戦」でデビューする。僕のバレー部も、新人戦を前に連日熱の入った練習が続いていた。男子バレー部の練習場所は職員室の前の野外コートで、女子テニス部コート、男子テニス部コートと3面が隣接していた。柔軟体操が終わりバレー部特有の指立て伏せやネット際のジャンプが終了すると、2キロのランニングをこなす。それから、コートに戻って本格的なボール練習となる。大会を1カ月後に控え、この日はセッターからのサイン練習と長身の前衛を生かすべく、取り入れた変則ローテーションの練習が主だった。前衛のレフトが私で、対角は1組の浅野に決まった。15分間の休憩に入り僕は、浅野に聞いてみた。

「1組でギターが弾ける、ちょっと日焼けした女子知ってる？」

「ああ、良枝だろ。秀才なんだよな、彼女は」

「そんなに？」

「いつも学年で3番以内だよ。ほら、隣。あそこにいるよ！」

浅野は女子テニスコートでサーブの練習をしていた彼女を指差した。

「無理だよ。良枝は堅いから・・・」

「そんなじゃないよ」

浅野はニヤけた顔つきで疑ったが、僕は浅野の興味を無視した。どちらかといえば長身でスリムな彼女が、夏の名残を残す陽射しの中で躍動していた。

新人戦一週間前、対戦相手が決まった。どの中学も新チームで、強いとか弱いといった情報はまったくなかったが、市内8チームのトーナメント形式で3連勝すれば優勝である。そして優勝すれば、週に2日は体育館が使用できるはずだった。当時の花形である男女バスケット部は、市内では常勝と言われていたほどで、体育館は常に彼等のものだった。時々バスケット部の練習が中止になると、僕等はそのときだけ体育館が使えるため踊りあがったものだ。しかし試合を直前に控えても、僕達は体育館をまったく使えなかった。そしていつもの野外練習では、汗の付いたジャージ